

Special Feature



“緊急メジャー・リーグ特集”っていうのは少し大げさですが、今回この『The Walker's』の記念すべき第10号の発行が夏休みの時期と重なることから、ジャズから少し離れて「ぼくのなつやすみ」といった雰囲気、プロ野球選手に憧れていた子供の頃を思い出しながらメジャー・リーグを特集してみました。6月に訪れたシアトルで観戦したマリナーズの試合は、ラッキーなことに松坂先発のレッドソックス戦でした！

★セーフコ・フィールド

7月10日（現地時間）、SFジャイアンツの本拠地AT&Tパークで行われたメジャー・リーグの第78回オールスター戦で史上初となるランニング・ホームランを含む3安打を放ち、日本人メジャー・リーガー初のMVPに輝いたイチロー。その数日後にはシアトル・マリナーズと5年総額9000万ドル（約110億円）とも言われる破格の契約を結んだ。そのイチローと城島がレギュラーとして活躍するマリナーズのホーム・グラウンドがセーフコ・フィールド。総工費1700万ドルをかけて建設され、1999年7月15日にオープンした開閉式の屋根付き球場だ。“Safeco Field”という名称は、シアトルの保険会社Safeco社から付けられたものだが、それまではアメリカン・フットボールの試合をはじめ多目的ドーム型施設でもあったキングドームで試合が行われていた。

このセーフコ・フィールドは本当に美しい！マリナーズの球団カラーでもあるダーク・ブルーに芝の鮮やかな緑と土の色のコントラストが絶妙で、こんな場所で野球ができる選手達が羨ましくもあるが、やはりこの美しいグラウンドに立てる人間は野球人としての天性の才能の持ち主に限られるのだろう。そして、このセーフコ・フィールドには名物とも言える独特のサウンドがこだまする。スタジアムの脇には数本の線路が敷かれていて、通りから人々が球場に向かう際にもこの線路を横切ることがあるため踏切があるのだ。なので、この踏み切りを貨物列車や長距離列車が通過するたびに汽笛を鳴らすのだが、その汽笛の音を場内のマイクが音響設備が拾ってしまうのだろうか、試合中だろうがお構いなしに定期的に「ホワァーン」ともいえない音が球場全体に鳴り響くのだ。最初は何の音か分からなかったが、度々こだまするこの汽笛の音に何ともいえない風情が感じられてくるのだった。

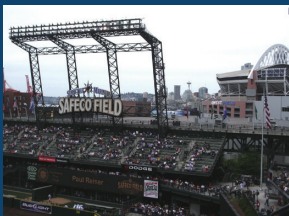
また、打席に入る選手を紹介するアナウンスの声もラジオのDJを彷彿とさせるようなよく通る軽快な響きで、いかにもメジャーっぽく、投球の合間に流れるエレク特ーンの音色やクイーンの名曲「ウィ・ウィル・ロック・ユー」のイントロなどにも鳥肌が立った。客席を埋め尽くす観客もビール片手にホットドッグやビザなどを頬張りながら思い思いに野球を楽しんでいる雰囲気。勿論、お気に入りの選手のシャツを着込んだ子供たちの姿もたくさんあったが、やはりマリナーズの「51」番Tシャツを着込む子供の姿が目立った。そんな雰囲気の中でメジャーの試合を観戦しているうちに、いつしか子供の頃に帰ったような錯覚に陥り、夢中でグラウンドの選手たちの姿を追う自分がいた。センターを守るイチローが常に屈伸運動をしている姿も印象的だった…。

★夢の対決！ イチロー vs 松坂！！

筆者がセーフコ・フィールドで観戦したマリナーズの試合は6月27日（水曜日）のデーゲーム。レッドソックスとの3連戦の3日目だったが、1戦目、2戦目はナイターだったため、せっかくメジャーの試合を観戦するなら青空の下で見たいと思いの3日を選んだ。勿論、松坂が投げる日程は気になっていたものの、当初は2戦目のナイターで投げるだろうと予想されていた。しかし、フタを開ければ運良く松坂の先発登板となった。この誌面で試合経過やイチローとの対決を事細かに説明しても仕方ないので割愛させてもらうが、この美しいグラウンドの中で対決する2人の姿を見て涙腺が緩んでしまったのは言うまでもない…。



芝の色も鮮やかでスタンドからの眺めも最高！
野球はやはり空の下が一番！ 屋根は不要。



セーフコ・フィールドの右手に見える建物は
NFLシアトル・シーホークスの本拠地。



「No.1」という意味なのだろう！大きなスポンジっ
ぽい素材で出来たマリナーズの応援グッズ。



本誌編集長がセーフコ・フィールドの外野スタンドから撮影したイチロー vs 松坂 in シアトルの瞬間！

★メジャー・リーガー兼ミュージシャン

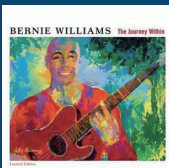
嘗てボー・ジャクソンという人気選手がいたが、この人は MLB (メジャー・リーグ) と NFL (アメリカン・フットボール) で二足のわらじを穿く選手として有名で、両方でオールスター・ゲームに出場した唯一の選手でもあった。そして、メジャー・リーガー兼ミュージシャンとして二足のわらじを穿く選手も存在する。昨年のシーズン終了後にニューヨーク・ヤンキースを退団し、現在はフリーエージェントになっている松井選手の元同僚であり、イチローも憧れていたプエルトリコ出身の名スイッチ・ヒッター、バーニー・ウィリアムスは「小さい頃は野球選手よりもプロのミュージシャンになりたかった」と語っていたようにギタリストとしても凄腕で、2003 年にコンテンポラリー・ジャズのレーベル“GRP レコード”からメジャー・デビュー・アルバム『ザ・ジャーニー・ウィズイン』をリリースしたが、ラテン調のカッコいいサウンドが印象的だった。同じく、元ヤンキースのチーム・メイトでバーニーと共に主軸バッテリーとして活躍したポール・オニールはドラマーでもあり、バーニーとよくクラブ・ハウスで共演していたそう。また、シンシナティ・レッズの現役のピッチャー、ブロンソン・アローヨはイケメン・メジャー・リーガーとしても有名なが、2005 年に『Covering The Bases』というグラングレ系のカヴァー・アルバムをリリースしている。他にも、2005 年に現役メジャー・リーガー 11 人が自慢のヴォーカルやギターを披露したコンピ・アルバム『Oh Say Can You Sing?』が発売されるなど、プロのミュージシャン顔負けの腕前を誇る選手は結構いるようだ。

野球と音楽といえば、メジャーの試合では 7 回表が終わると「Take me out to the Ballgame (私を野球に連れて行って)」を総立ちで大合唱する恒例の行事がある。この曲は 1908 年に作られた野球の愛唱歌だが、アンドレ・プレヴィン (p) とラス・フリーマン (p) によるジャズ作品で野球のダブル・プレイとピアニスト 2 人による演奏という意味をひっかけた『Double Play!』というアルバムでもこの「Take me out to the Ballgame (私を野球に連れて行って)」がカバーされている。

★日本のプロ野球を考える…

最後に、メジャー・リーグの試合を観戦してふと思いついたのは、小学生の頃に父親に連れられて見に行った後楽園球場の風景。夕日が傾く頃に球場内に足を踏み入れた時の興奮…。鮮やかな緑の芝に影が伸び、空に響くフリー打撃の音…。夜空に変わる頃にプレイボールの音がかり、選手紹介と共に球場内に響くエレクトーンの音色…。スタンドの応援団が奏でるラッパの音色…。日差しが強かった日中と変わって涼しげな夜の空気…。今はそんな雰囲気も味わうことが出来ない屋根付きの東京ドームとなった巨人軍の本拠地。思えば、日本のプロ野球に興味は薄れ、嘗ては多くの子供たちが憧れ華やかだった巨人軍のイメージが変わり始めたのはドーム球場の出現時期と重なっているような気がする。また、当時は日本シリーズもほとんどデイクームで、太陽や夕日に照らされながら熱戦を繰り広げていた思い出がある。現在メジャーの球場で屋根付き完全密閉型の球場は存在しない。パ・リーグの台頭など面白さも出てきた日本プロ野球だが、もっと根本的な改善が必要な気がする。

2006 年にリリースされたバーニー・ウィリアムスのメジャー・デビュー盤！



ザ・ジャーニー・ウィズイン
バーニー・ウィリアムス
(UCCR-1035 ¥2,548 [tax in])

シンシナティ・レッズ所属の現役の投手ブロンソン・アローヨのアルバム！



Covering The Bases
Bronson Arroyo
(Asylum [Import])

十人のメジャー・リーガーが吹き込んだ 2005 年リリースのコンピ・アルバム！



Oh Say Can You Sing?
Music Recordings By Major
League Baseball Players
(Good Sports [Import])

アンドレ・プレヴィンとラス・フリーマンによる野球をテーマにしたジャズ作品！

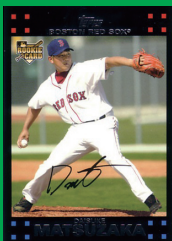


Double Play!
Andre Previn & Russ Freeman
(JCCD 157-2 [Import])

【Topps Baseball Card】 1951 年から「Topps Baseball」を発売しているアメリカのトレーディングカードの老舗ブランド。2007 年 8 月現在、メジャーで活躍する日本人選手を 2007 年度の最新 Topps カードで紹介！【<http://www.topps.com/>】



イチロー
シアトル・マリナーズ 51
The Topps Company



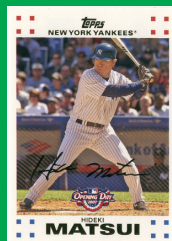
松坂大輔
ボストン・レッドソックス 18
The Topps Company



城島健司
シアトル・マリナーズ 2
The Topps Company



岡島秀樹
ボストン・レッドソックス 37
The Topps Company



松井秀喜
ニューヨーク・ヤンキース 55
The Topps Company



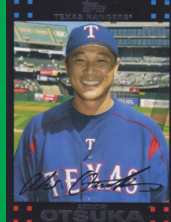
田口壮
セントルイス・カージナルス 99
The Topps Company



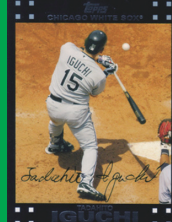
斉藤隆
ロサンゼルス・ドジャース 44
The Topps Company



松井稼頭央
コロラド・ロッキーズ 7
The Topps Company



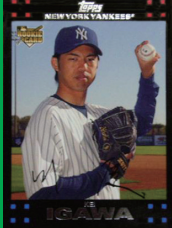
大塚晶則
テキサス・レンジャーズ 40
The Topps Company



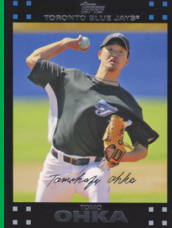
井口資仁 (7/28 ホワイトソックスからフリーズに電撃移籍！)
The Topps Company



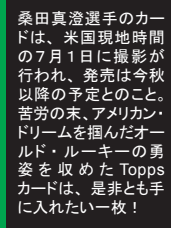
岩村明憲
タンパベイ・デビルレイズ 1
The Topps Company



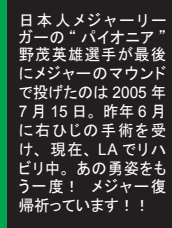
井川慶
ニューヨーク・ヤンキース 29
The Topps Company



大家友和 (7/31 現在、3A のタマ・レニアーズでメジャー復帰を目指している)
The Topps Company



桑田真澄
ピッツバーグ・パイレーツ 18



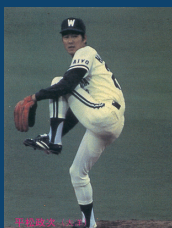
野茂英雄

【プロ野球チップス】 日本では 1973 年からカルビーが製造しているスナック菓子のおまけとして付いているプロ野球選手のカードが有名。(元々は「サッポロポテトバーベ Q 味」に付いていたが、その後は現在のように「ポテトチップス」に付いている。)

右の 3 枚のカードは本誌編集長が大ファンだった横浜大洋ホエールズのエース＝平松政次選手と、横浜ベイスターズのスラッガー＝駒田徳広選手のプロ野球チップスカード。70 年代～80 年代当時のカードは現在よりもひと回り小さかった。
＊平松政次さん、駒田徳広さんご本人より写真掲載許可を了承済みです。



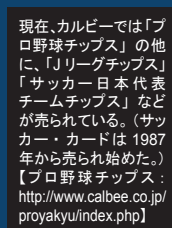
平松政次 横浜大洋ホエールズ 27 (名球会会員)
必殺のカミソリ・シュートで巨人キラーの異名を持った大エース。レコードを出すほど歌も上手かった！



大塚晶則 テキサス・レンジャーズ 40



大塚晶則 テキサス・レンジャーズ 40



大塚晶則 テキサス・レンジャーズ 40

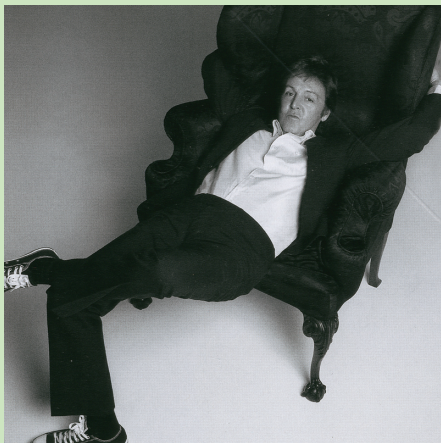
STARBUCKS meets Paul McCartney = Hear Music

1971年に米国ワシントン州シアトルで開業し、創業当時よりオリジナル選曲の店内BGMを流し始めた「スターバックス コーヒー」。シアトルにある本社ビルはシアトル・マリナーズの本拠地セーフコ・フィールドと目と鼻の先だ。90年代半ばには、従業員であったティモシー・ジョーンズの発案によりあの「ブルーノート・レコード」と共同でJazzのオリジナル・コンピレーション・アルバムを発売。Jazzから出発したジャンルも、90年代後半からはアフロPOP、イタリアン・オペラ、シカゴ・ブルース、ブラジリアン・サンバ、フォーク、キューバ・ミュージックと拡大し、99年に音楽レーベルを買収し、スターバックス限定コンピレーション・アルバムを次々とリリース。本国アメリカでは既に100以上のアルバムを発売しているという。その後、2004年に試聴が可能な、豊富なラインナップのCDとメディアパーと呼ばれる100万曲ダウンロードが可能なPC端末を備えたストアとして、「Hear Music Coffeehouse」という名称でカリフォルニアのサンタモニカに音楽のリテイル商品にも注力した店舗をオープン。同年、コンコード・ミュージックと共同でレイ・チャールズの遺作となった「Genius Loves Company」を発売し、後にグラミー賞を獲得。また、本アルバム・セルスの約3割がスターバックス店舗であったことが業界の話題になり、この事実が今回の新音楽レーベル「Hear Music」設立のきっかけとなったそう。そして、今年3月コンコード・ミュージックと共同で新音楽レーベル「Hear Music」を設立し、第1弾アーティストが「ポール・マッカートニー」であることを発表！あの松坂大輔投手とボストン・レッドソックスの契約にも勝るとも劣らないインパクトだった。

ポールと契約に至った経緯は、両者の目的が合致したことによるところが大きいという。ポール側の思惑として、常に音楽について新たな試みが行えるような「新たな挑戦の場」を求めていたこと。スターバックス側のそれとして、「新レーベル設立に相応しい、人格、音楽への姿勢、常に新しいことに挑戦する意欲を備えたアーティスト」であること。まさに絶好のタイミングだったのだ。尚、「Hear Music」リリース第2弾はジョー・ミッCHEルの5年ぶり復活作となる『シャイン』（9月19日発売）だそう。今後特定のジャンルのみに曲を限定するのではなくて、アーティストの国籍や性別についても制限なく検討していくという。日本人アーティストとの契約というニュースも夢ではないかもしれない…。スターバックスがジャズを起点として音楽ビジネスをスタートさせたという事実は、本誌にとっても大変興味深く、ジャズの可能性に益々期待が膨らむ。スターバックスがジャズに注目したのは、「コーヒーともっとも愛称のよい音楽」であるという考えからで、現在でも店内でのみ販売されているオリジナル・コンピレーション・アルバムの選曲にジャズが多いのもその影響からだ。また、オリジナルレーベルである「Hear Music」に加えて、既存音源をスターバックス独自のセンスでセレクトしたコンピレーション・アルバム（＝スターバックス・エンターテインメントCD）は顧客ニーズも高く、今後も平行して作品をリリースしていくという。

「Hear Music」と共にスターバックスが目指すもの、それは「今回をきっかけとした『コーヒーストアでの新しい音楽提案』とそれができるCafe & Musicコンセプトの新しい店舗作り」だそうだ。
(取材協力：スターバックス コーヒー ジャパン 広報室)

スターバックス コーヒー ジャパン HP: <http://www.starbucks.co.jp/>
ヒア ミュージック HP: <http://www.hearmusic.com/>



メモリー・オールモスト・フル
ポール・マッカートニー
¥2,200 (税込)
※日本国内のスターバックス
コーヒー全店舗
(但し、一部店舗を除く)
子供時代〜リバープール〜過ぎ
去った夏の思い出を歌った
ポールのソロ21曲目!

ポール・マッカートニー公式サイト: www.paulmccartney.com/

1. Dance Tonight
2. My Ever Present Past
3. See Your Sunshine
4. Only Mama Knows
5. You Tell Me
6. Mr. Bellamy
7. Gratitude
8. Vintage Clothes
9. That Was Me
10. Feet in the Clouds
11. House of Wax
12. The End of The End
13. Nod Your Head

¥3,300 (税込)
(デジパック仕様&ボーナス Disc 付
初回限定デラックス・エディション)
ユニバーサル: UCCO-9151
★3曲のボーナス・トラックと
ポール自身の声による本作
についてのコメントを収録!

スターバックス 最新オスメ CD



ノー・プレイス・ライク・ソウル
ソウルライブ ¥2,400

スターバックス・エンターテインメント 最新オリジナル CD



サルサ・エクスプロージョン
various artists ¥2,000

NYを拠点に活動する新世代ジャズ・バンド Soulive の最新作! 名門 Staxレーベル移籍第1弾となる5th アルバム。ブルーノート東京でのライブを収録したスターバックス限定のボーナス・トラック2曲を含み、スターバックス限定パッケージで登場!

NYの名門 FANIAレーベルから、夏にぴったりのサルサ・サウンドを集めたコンピレーション・アルバム。ウーリー・ロロンやデイト・フエンテなど、ラテン音楽を代表するアーティスト達の音楽がズラリ! 腰をクネクネ踊り出したくなること間違いなし!